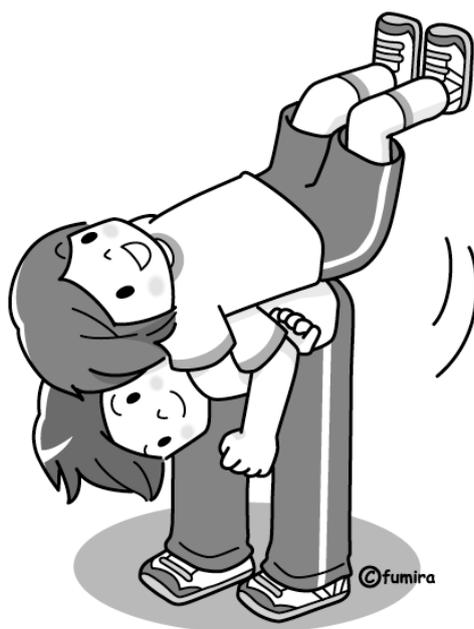


平成 21 年 10 月 18 日 親学講座

# モンスターペアレントの本音

===正しく学校に要望を伝えるために===

フリージャーナリスト  
多賀幹子先生 講演録



主催 親学会

## 学校を暴れ回るモンスターペアレントたち

「モンスターペアレント」という言葉を皆さん耳にされたことがあるでしょうか。テレビドラマにもなりましたし、2年ほど前に出てきた頃に比べますとすっかり定着してしまったというような感じもします。このモンスターペアレントというのがどこから出てきたかと言いますと、日本人の和製英語でして、決して海外ではそのまま通じる言葉ではありません。これは、もともと小学校教諭をされていた向山洋一さん（日本教育技術学会）をお訪ねしまして、この方が命名されていちばん始めにお使いになったのが「モンスターペアレント」なんですね。向山さんは先生を教えていらっしゃる方なのですが、最近は学校や親に非常識な要求をしてくる大変な親が出てきているという声が現場の先生の方から挙がっていると仰ってました。それで、この親たちの暴走はもう「モンスター」と名付けるしかないということになりました。その名の通りで、モンスター=怪物です。そんな親たちのことを指すモンスターペアレントという和製英語ができました。あっという間に一般化してしまった感じですね。まず具体例をあげてみたいと思います。

### **Type1** 最も多い「わが子最優先」タイプ

モンスターペアレントにはタイプがあって、いろんな分け方があります。さまざまな分野で親が学校に言ってくるというわけです。色んな方がいろんな分け方をしていますが、私の場合は4つに分けました。

いちばん始めが「うちの子どもを最優先させる」タイプ。最優先というのは、何よりもいちばん始めに自分の子どもを持ってくる、と言うことですね。これがいちばん多いタイプですね。具体的には「うちの子どもをいじめた子を転校させてください」というクレームです。いじめで亡くなったお子さんがいらっしゃるように、いじめというものは非常に気の毒な例が出ていますので、そういうことで万が一自分の子どもが自殺でもしてしまったら大変だというのがあるのでしょうか。話し合うとか、まずクラスの中で解決するとかいうことよりも、「そういう子どもが教室の中にいるからいけないのだ。転校させてしまえ」とズバツと来るわけですね。そうは言われても先生は困ります。転校までいかななくても、「家の子どもがいじめられないように、先生よく見ていてください」と言う親もいます。

「何かあったらどうしてくれるのですか」ということで、よく見ててくださいと要求する。なによりも、先生が何にもしてくれないと苛立つ親の姿があるわけです。あるいは、「うちの子がいじめられたので担任を交代させてくれ」。他人が何かしてくれればいじめも続かないだろうに、ずーっといじめられている、その無能な担任を交代させようと、校長先生をすっ飛ばして、教育委員会に言う親が出てきているのです。

修学旅行の写真を廊下に貼り出し親が買うシステムになっていますが、「4枚も〇〇君は写っているのに自分の子どもはたった1枚しか写っていない」。先生どうしてそういう依怙最良をするのですか、とクレームを述べる。こういうのはおかしいとねじ込むわけです。

学芸会の時期が近づいてきますと「学芸会の主役はうちの子どもにしてください。」と言ってくるわけですね。先日ある小学校で学芸会を見てきたのですが、赤ずきんちゃんが壇上には16人並んでいました。女の子は全員赤ずきんちゃんをやるそうです。本当の話です。オオカミは先生がやるということでした。男の子を一人オオカミにさせると、どうしてうちの子が一人オオカミなんだ、と。先生の方で先手を打って全員女の子は可愛らしく赤ず

きんちゃん、男の子はオオカミをやらないという、そういうところまでいっているようなのです。

お弁当の話になりますと、「冷たいからうちの子のお弁当をチンしてやってくれ」と言う。先生も大変ですよ。「うちの子には家で掃除なんかさせていません。掃除をやめさせてください」。掃除なんかさせないで、という。掃除というのが道徳的・教育的意味がありトイレの掃除などを進んでさせている学校がある中で、逆を行っているのです。汚い、汚れるからと言います。家でさせたことがないからこそ、学校でさせる意味があるんだろう、ということなのですが、考えないのですね。やめてくれ、というのがスッと入ってくるわけですよ。

子どもは、学校では先生に叱られるものです。そうすると「うちの子が先生の叱る言葉によって傷ついた」と。先生の叱り方が悪いから先生謝ってください。というのが最近とても増えているのですね。うちの子はとても良い子で、悪いことなんかするわけがない。もしなんか悪いことをしているのだったら、先生が、友達が悪いのでしょうか。先生の叱り方が悪いからうちの子が泣いて帰ってきた、ということになります。一般的な親だったら「あんたが何かやったんじゃないの。叱られるようなことやったのでしょ」という言葉が出るのです。が、「いや、先生が悪い」と言ってくるというわけです。

勉強の方に入ってきますと「うちの子の成績をあげてほしい」というのがズバリですね。通知表が配られますと「せめて3だと思っていたのに、どうして2なんですか、先生」と。クラス全員の一覧表を見せて、どうして2だったのか根拠を見せて欲しい。3のはずだ、というようなことですね。立川の中学校の校長先生でしたけれども、先生に、通知表を配った後は必ず電話の前にちゃんと坐っていて、必ず親の方から電話がかかってくるのできちんと説明ができるようにして下さいと仰ってました。不在にしているとまた何を言われるか分からないので、きちんとご説明が付くようにと。勉強の方になりますと、「英語の発音が悪い。あの先生は英語の発音が悪いから先生を替えて欲しい。あんな発音はとんでもない。うちの子があんな発音を覚えたらどうするのですか」と先生を替えて欲しいということですね。特に英語の発音に関してが多いそうです。「うちの子の成績が悪いのは先生の教え方が悪いからだ」と。うちの子非常に優秀なはずで成績が悪いのは先生が悪いからに決まっている。ケンカなどについては、「うちの子は被害者で、あの子は加害者なのにどうしてうちの子を残したのか」という怒りの電話が親からかかってくる。「ケンカ両成敗」という考え方がかつて日本ではあったわけですがけれどなかなか通じない時代に入っているわけですね。あるいは、「うちの子がちゃんと説明したのにそれをどうして先生は信じてくれないのか。どうしてうちの子の言うことが信じられないのか」そういうねじ込みが入ってくる。

そのほか、咳をしていたのに体育の授業に出席させられた。雨が降っていたのにうちの子は傘も貸してもらえないで帰された、とか。ニンジンが嫌いなので給食からニンジンだけは抜いて欲しい。給食にはそういう好き嫌いをなくす意味も込められているのですが。塾の合宿があるので、林間学校には行かせません。うちの子が不登校になるのは学校の先生や友達に原因がある、と言ってくるのですね。

とにかく自分の子どもが可愛い。自分の子どもしか見えていない、というのでしょうかねえ。少子化あたりが影響しているのかもしれない。とにかく自分の子を最優先して学校

でも自分の子を大事にして欲しい、いじめなんかとんでもない。成績も上げて欲しい、親が恥ずかしげもなく直接言ってくるという感じです。

### **Type2**「親の都合」優先タイプ

2番目のカテゴリとして「親の都合」を最優先させてしまうタイプですね。家族旅行に行くので子どもを欠席させたい、というのが非常に増えています。お正月や連休などはグアムやハワイに行ってきたのに値段が高い。一日ずれるとグッと格安になりますね。そこを狙って旅行に行かせたい、お父さんの休みも絡んでいるので、学校よりも家族旅行の方を優先させたい。家族の都合を前に持ってくる親がいる。どちらが大切なのか、ということで先生も頭に来るのでしょうけれどしゃーしゃーと言ってくるということなのです。

また、共働きのご家庭がとても増えています。台風などで急に学校がお休みになる。そうすると「子どもをどこに預けたらいいのか」「子どもを保健室で預かって欲しい」と言ってくるわけですね。保健室は空いているはずだから預かって欲しい、と有無を言わせない迫力で子どもを置いてってしまう、というのです。学校もお手上げ状態で、外に追い出すわけにも行かないし、と先生は仰っていました。非常に親の生活が厳しくなっていますので、そういう風にして追い詰められている家庭状況が浮かび上がってきているのです。

### **Type3**おもしろがっている?「愉快犯」タイプ

3番目は愉快犯タイプをご紹介します。

運動会で雨が降って順延することがありますね。雨天順延が何年か続いたある小学校でのこと。「こういう雨降りの年が続くのは校長が雨男だからだ」と。校長先生は絶句したそうです。そういうことを言われてもどうしようもないわけです。苦笑いで済めば良いのですが、そういうことを言われると困ると校長先生は仰っています。愉快犯ですね。学校の反応をおもしろがっているのです。社会が病んでいるようなものを感じてくるわけなのです。「雨が降って本当に大変ですね」という言葉は出ない代わりに、それはもう雨男だからだ、と言うような親が出てきている。

中学校あたりだと、「おたくの中学校の生徒がいつも家を覗いている。家には娘がいるのだけど、」という電話がかかってくるそうです。中学校の男子がそんなことをするとは考えられないのですが、学校の狼狽を楽しむような親がいるようです。これもまた、病んでいると感じます。とにかくどうしようもないことで電話がかかってくる、と言っていました。また、秋は落葉の季節ですね。落ち葉がたくさん落ちてくるのですが、学校の中に大きな木がある。「お宅の枯れ葉が家の庭に落ちてくるんだ」と言われまして、学校側の対応が、教育委員会を通さないでその木を切ってしまった。これが問題になりました。せめて色々対策を話し合ったら良かったのに。みんなに愛されていたであろう樹齢何年かの木を、校長先生のご一存で、そういった苦情のためにスパッと切ってしまった。いかにも学校の困り果てた様子を笑って見てる、みたいな不快な感じで受けとったのですけれど。

秋の季節ですとあちらこちらで運動会がありますよね。「ピストルがうるさい、音楽がうるさい」という電話が近隣から必ずかかってくるのです。これは、働き方に関係があるのではないかと。深夜営業のお店などが最近増えています。帰ってきてくたびれて、午前中寝

ているような方も出てきているわけです。運動会は一年間にたった一日なのに我慢できない。社会の労働の構造が関わっているのではないかと私は思ったのですが、午前中の貴重な睡眠時間を奪われるのが我慢できない。「子どもたちが今頃楽しく走っているのだろう」という寛容性が社会から失われている。学校を見る目が非常に厳しくなっている。学校が聖域なんかではなくなっている。社会の変化に伴って学校への目も変わってきている。今日は予行練習をして楽しく踊っているのだろうなあ、走っているのだろうなあ、という温かい目が失われている社会なのですね。必ずあれはうるさい、やめてしまえ、ということで、ピストルをやめて先生が口で「用意、ドン」と言う。音楽はボリュームを下げるとかやめてしまう、といった都内の学校で非常にそういうのを耳にするようになりました。まあもちろんそういう学校ばかりではなく、温かい目で見つめている地域もあって、ちっとも構わないからピストルだろうが音楽だろうが、やってください、という学校もたくさんあるだろうと望んでいるのですが、周囲の声に押されている学校が非常に多いというのは事実として出てきています。ふだんの授業と授業の間を知らせるチャイムの音をいちいちやるな、土日は止めろ、など。運動会だけだったのが普段の生活の中でもエスカレートしてうるさい、と苦情が入ってくるのですね。あるいは、「子どもの担任の先生を若くてキレイな女の先生にして」とか。困るのを楽しむという親がいるのですね。いつの間にこういう社会になってしまったのでしょうか。何が楽しくてそんなことを言うのか分かりませんね。

#### **Type4**「金品目的」タイプ

4つ目は、金品お金を学校から取ってやろうというはっきりした目的があるのですね。経済的なものを欲しいと言ってくるのですね。

子どもが学校で骨折した。通学させるのにタクシーで登校させるわけですね。親も付きそうということになりますと「親の休業補償と慰謝料を出して欲しい」と。はっきりお金を目的としている、ということです。

携帯電話で色々な問題が起きていますが、ある学校では携帯電話は持ってきてはいけませんよ、という規則でした。そこにあるお子さんは携帯電話を持ってきてしまった。それが見つかりまして、学校は携帯電話を取り上げました。親は「申し訳ありません。学校では禁止になっていた携帯電話を持ってきてしまって」とは言わないのです。「基本料金を日割りで支払ってほしい」というように、お金が欲しい、払うべきだという苦情が寄せられて学校は立ち往生するわけですね。

あるいは子どもが病気で休みました。そうしましたらその間の給食費を日割りで計算して返却して欲しい。食べてないわけですから、と真顔で言ってこられると先生の絶句する様子も目に浮かぶのです。

非常に極端な例なのではないか、ごく一部だろうと私も望んでおりますし、そうだと思いの方も多いのではないかと思います。かつては学年に一人くらいこういううるさい親がいたと言われていますが、最近では一クラスに一人くらいこういう親がいますよ、と急速に、加速度がついて「あの人が言って思う通りになった」と分かると、私も言わないと割を食う。強く言って出ると学校が下がるという例が出てくると「何だ!うちも言ってかなきゃ」と非常に悪い循環が出てきて数が増えているということです。そういうケースがだん

だんなくなっているという話しはまだ聞いておりません。ですから日常化しているのではないのでしょうか。学校は聖域ではない、という認識になってきているのです。かなりショックを受けている方もいらっしゃるのかもしれないのですが、多分自分の周囲を見渡すと一つや二つ「そういえば聞いたことがある」とか、そんなことちょっと友達が言っていたなどたいてい聞いたことのある時代に入ってきたのではないかと思います。

### **モンスターペアレント増加の理由はさまざま**

それではいったいどうしてこういうめちゃくちゃな親が増えたのでしょうか。日本人の親は学校を見る目が温かく、先生は尊敬される存在であったと思うわけですが、なぜこういふとんでもない親が出できたのかぜひ知りたい。

#### **理由 1.日本人の質の劣化**

色々な先生や教育関係者などにもお会いして取材をしたわけなのですが、一般的に出てくるのが日本人全体の質が落ちたのではないかと、ということですね。漠然とした言い方なのですが、分かるような気もする。「日本人の質の劣化」という声が多く聞かれました。品格が落ちている、というのでしょうか。学校にそんなこと言うなんて、日本人は落ちるところまで落ちた、という憤りの声もたくさん聞きましたし、とんでもないことだという話しも聞きました。

#### **理由 2.「荒れた学校」体験からくる不信感**

それから、荒れた学校を経験したからなのではないかと。かつて中学校を中心として、校内暴力が荒れ狂った何年かがありましたね。ちょうどその校内暴力を経験した子どもたちが、ちょうど今親になっている時なんです。高齢出産ですから、校内暴力を経験したお父さんお母さんが自分の子どもを再び学校へやる、と。ある種の色眼鏡をかけて学校をみているのではないかと。「どうせ学校の教師なんてひどいものだよ」「どうせ学校なんて調子のいいものだよ。何かの時に逃げるよ、校長は」という風に、当時の染みついた色々な経験が蘇るのでしょうか。うまくいっているときは良いのですが、何かあったときに「あ〜あの時もひどかったからなあ」という記憶が蘇り、フラッシュバックがある。「どうせ学校なんてたいしたことないよな、どうせ先公はにげるよな」というのを聞いたのですが、学校は管理主義でコントロールして、事なかれ主義だとあの時の経験が蘇るといふ。だからじゃないの、というご説明を受けました。

#### **理由 3.子育ての孤立感**

ただ、モンスターペアレントは幼稚園、保育園、小学校から出ている。1才2才3才の子どもの親から出ている。広がっているという話しを聞きますと、どうも計算が合わなくなってきました。その荒れた中学校を経験したからという説明がなかなか合わなくなっているのです。大阪大学大学院の小野田先生とお話ししたときに、「今は大学でも大学院でもありますよ」というお話を伺ってきて、なるほどということになりました。荒れた学校を経験したという単純なことではなく、それを乗り越えている、ということが言えるかと思えます。

親が孤立した状況で子育てをしているからだろう、というのを取材した方のなかでも大変多くの方たちからこの説明を受けました。今、親はどういう状況で子育てをしているか、というところから孤立した状況で子育てをしている時期は今まで日本にはなかったのでは

ないか、ということなんですね。非常に都市化が進み、核家族化しておりまして、お父さんが勤務地近くの郊外に住んで、初めての子どもをお母さんが一人で一生懸命育てている状況などがあちこちで出ていますねえ。親も離れていますし、知り合いもない。親の世代は、自分の人生を充実させるためにたくさんがんばっている。「お母さんちょっと来て」と言ってもお母さんは働いていらっしゃるし、山に登って忙しかったり、シニアの生活を充実させるためにがんばっているのですんなりに遠くからお母さんを呼ぶこともできないわけですね。お友達もない、ポツンと郊外のマンションで子育てをしている。

かつて公園デビューという言葉がありましたよね。子どもを抱いて公園デビューしてお友達を探そうという言葉がありましたけど、最近は公園に行っても子どもがいない、といいますね。少子化がそこまで来ているわけですね。今は「公園渡り鳥」って言うのですね。親子はいないか、子どもの遊び相手はいないか、子どもを抱いてあっちの公園、こっちの公園を探さないとなかなか子どもの遊び相手もないのですね。

昔は公園デビューするだけ良かったんですね、そこに子どもがいたんですから。公園に行けばママ友がいたわけですが、最近は公園を回っても子どもを持つお母さんがいないねえ、と。どこへ行っても渡り鳥ですよ。「公園渡り鳥」というのが出ているそうです。この二十数年以上、少子化傾向が続いておりますと、非常に親が孤立している状況の中でお母さんが子育てを一生懸命励む。そのお母さん自身が少子化ですので、妹の面倒を見て育ったとか、おばさんを見てくれて一緒に大家族の中で育ったとか、家の前に出ればおじさんがいて、そんなことしちゃいけないよお、って言ってくれるようなそんな雰囲気もなく、道路に出ちゃ危ない、車が危ない、変質者がいるというような状況で、非常に親はピリピリと孤立した状況で子育てをしている。そうすると、さびしいお母さんの状況の中で、非常に周囲とのコミュニケーション不全があり、そこに学校、というものが出てくるわけですね。

学校は善意の集団です。私たちはそう信じておりますね。そこには先生という教養がある非常に立派な優れた人がいるわけです。親が何かをぶつけやすいんです。持って行きやすい。自分の孤独を学校にぶつける。満たされないものを学校にぶつけるのですねえ。寂しさを先生にぶつけていく。少なくとも親から何か言われれば先生は無視しないだろうと、持っていくところが学校なんですね。というのは、学校だと授業参観に行ったり、運動会があったり、面談があって先生と知り合うことが多い。先生にお話を伺っていくと、最初は「子どものこと」と言っていたのに「実はお父さんがリストラに合って」とか「夫婦仲がうまくいっていない」とか「お姑さんから色々言われている」とか、そういう親の鬱屈した孤独感や寂寥感を埋める場所として学校が求められていると話されますね。

貧困、ドラッグ、お父さんのリストラ、離婚、家庭内暴力、といった問題が学校に持ち込まれて、地域の影響を学校がモロに受ける。それは多分学校というところを信用しているからなんですね。信じているからこそ親は「学校ならきっと・・・」「先生ならきっと・・・」孤独を癒してくれる、受け止めてくれる、何か応えてくれるのではないかと、先生に対する期待というものが非常に多くなってきて、先生がお友達、相談役という役すら担わなければいけない時代になってきているわけです。そして、それが変形した形としてモンスターという形になってしまったのではないかと。こういったような親の孤独、孤立無援、友達がいない、お父さんの不在ですね。いちばんお母さんの相談役になるはずの父親の不在、

というようなこともありまして、母親の孤立孤独といったことがそっちの方向にいったのではないかと。そういう理由がとても大きいかと思えます。

#### **理由 4.親の高学歴化**

それから高学歴化、ということが影響しているのではないかと、と言う方がいらっしやいました。最近、親の学歴が非常に上がっているということですね。かつて学校の先生といえは村の文化人でして、何か困ったこと相談事とかあったら、先生にお聞きすればきっと知っているとか、先生に伺ってみよう、という風土があったかと思うのですが、今は、学年のはじめの親の懇談会で、いちばん始めに「私が今日から担任です」というと、パッとある一人のお母さんから手が挙がりまして「先生どこの大学出たの?」と聞くんですね。先生はズバリ聞かれた、と言っておられました、先生はビックリしますよね。こういう非常にエゲツないというか、そういうことは聞くモノではない、という感覚が失われ日本人は劣化しているのではないかと。そういうことを聞く親が出てきている、と。親は大学または大学院を出ている高齢出産でして、30代後半で結婚して子どもを産んで、40代で子どもを学校に入れますと、新卒の先生ですと20才も年の差があるわけです。大変な高齢化出産でキャリアウーマンが増えていらっしゃると、子どもが小学校に入る頃は、まさに40代半ばなんですね。そうすると新卒の先生だと二回りも違うのです。昔で言う「恩師の影は踏まない」ということが通用しない。下に見えちゃってしょうがない。可愛く見えちゃうのですね。「先生可愛い」と言われ軽く見られてしまうのですね。苦情が言いやすい文化の風土になっている。この辺は親が気をつけて欲しいことの一つですね。たとえ一回り以上違う先生であっても、先生は先生であるわけですから、先生をしてもらうためにも先生に対して敬語を使ってください、と親が子どもにさりげなく先生に対する言動には敬語を使って大事にして欲しい、ぜひそうしていただきたいと思っています。そうしないと、見るからに人生経験からしたって、先生が太刀打ちできないことは分かるわけですね。親が45才ですと海千山千人生経験も積みキャリアも積んでいるわけですね、がんばってきたお父さんお母さんが多く、先生が可愛く見えるのも不思議はないわけですね。そういうときこそ、自分の子どもを見ていただく先生になるわけですから先生には敬語を使ってお話ししてください。そして、子どもには先生に対して自然な敬う気持ちを持たないといけない。そういうことがとても大事になってきた時代なのですね。親が海外に留学した、高学歴化しているということ、バリバリやってきた方が増えたことは日本の社会においては良いことなのですが、学校に向き合ったときは一介の親にすぎないわけですから、ぜひぜひ心がけてほしいと思います。

#### **理由 5.親子密着型・放棄型の増加**

親子関係の変化も理由の一つではないかと言われていています。学校と親の問題ではなくて、親子の問題が学校に入ってきているのではないかと。親子関係の劇的な変化が形を変えて学校にぶつけられているのではないかと、ということを沢山の方が指摘されています。私もこれは関係があると、にらんでおります。非常に親子関係が二極化しております、べったり親子がくっつく密着親子。友達みたいな親が増えたとか昔から言われていたのですが、特に親と子の境目が付かないくらい非常にくっついておりまして、親が子どもの話を客観的に判断できない。ですから、子どもが学校の先生に怒られたと言うと「それは、おまえが悪いことをしたんじゃないの。先生が叱るぐらいだったらきっと何かやらかしたんでし

よう」というのが親の判断であったはずなのですけれど、子どもから言われたとおりの「何であんたが叱られなくちゃいけないの。あんたは良い子なのに。それは先生がおかしい。ちゃんとあの先生は見ているのか」という風に子ども目線、生徒目線なのです。親が親として在っていないのですね。親としての見解を示すことができないわけです。

実際に伺った話では夏休みの登校日が一日だけありまして、二人の生徒さんが一緒に行っとうさぎに餌をやり、稲を育てているのでお水をやる、と。たった15分くらいの夏休みのたった一日だけを二人ひと組で学校へ行くことになっているわけです。ある日親から電話がありまして「うちの子はせっかく行ったのにA子ちゃんはこなかった。先生A子ちゃんにペナルティを与えてください」という電話がかかってくるわけですね。そうしますとその校長先生は、どうして親としての考えを示せないかと。「あなたが行ったから稲は枯れなくて良かったね、兎がひもじい思いをしなくて良かったね」と。A子ちゃんは来なくてもあなたが行ったから本当に良かったねえ。という風に親としての考え方を示すことができないわけですね。一緒になって子どものように、損得でモノを言うのですよね。なんだかおかしいねえ、と校長先生が仰ってました。

親子は密着していて、授業参観の時なんかでも、教室のドアが前と後ろにあるわけですが、お母さんが前のドアをガラッと音高く開けて「●●ちゃん」と自分の子どもの名前を呼ぶわけですね。そうすると子どもがニコッと笑って、そこを写真に撮るわけですね。授業参観は家族旅行じゃないんですけど、と先生は思ったと仰っていましたね。それで、先生が紙を貼り『後ろのドアからお入りください』という親が非常に不快な顔をする、というのですね。

なぜ後ろなのか理由がわからない。子どもの勉強の妨げになりますから、集中力の妨げになりますから後ろから入ってくださいと理由を書けば分かると言うそうなんです。中には「ビデオを撮っているのだから前から入ったって良いじゃないか」という親に対して「ビデオを撮られたら困る」と説明しますと「撮られて困るような授業をしているのか」と逆に言い返されてしまったそうです。親と子の境目が無い。親子密着型になっていると。子どもも先生に叱られるのは大丈夫なのですが、親に叱られるのはこたえるそうなんです。親が子どものために一生懸命にやってくれている、ということを理解しているものだから家で親に叱られる方がイヤ、と。仲良く不快なことを避けながら、少子化の中、大事に大事に親が育てるわけです。それが学校に行くと、我慢させられた、叱られた、いじめられた、ということになりますと、学校が、このパラダイスの親子関係を邪魔する存在として映るわけです。非常に不愉快になってくるから親は「転校させろ」だの「プライドがズタズタになったから先生謝ってくれ」とか。先生の叱り方が悪いに決まっている、うちの子はすごく良い子なのですから、そんなわるいことするわけありません。そう親はいうわけです。そういう風に親は言い募るのですが決してそれがその子の全てではなくて学校ではその反動が出ているわけです。暴れまくってみたり、隣の子どもを叩いてみたりしているかもしれない。学校は我慢をする、とか友達に譲る、とか謝るとか、社会に出て行くためにはとても重要なことを、集団生活の中で大切なことを教える重要な場ですが、ちょっとそういうことをさせると親が怒りまくるわけです。「家では我慢なんかさせたことがないから我慢させないでくれ」「冷たいごはんなんか食べさせないでレンジで温めてくれ」「ニンジンが嫌いなのでニンジンも食べろなんて不愉快なことは避けてください」「掃

除なんか汚くていからイヤだといって家では掃除させていないので学校でも掃除させないでください」親子が密着した状態。密着型。

もう1つは放棄型です。お母さんはパチンコに行ってしまうと、かつてのボーイフレンドと合う間に、寝ていた子どもがベランダに出てしまって落ちてしまう。親がいない間に火遊びを始めてしまう、とか。時々非常にかわいそうな事件を聞くことがありますね。そんな点で二極化が進んでいるわけです。ベツタリと親子が楽しくイヤなことを避けながら親子が楽しく密着しながら暮らし、学校を敵視するか、育児に関心がなくて放棄してほったらかし。自分の楽しいことに夢中になる。子どもは目の前にいるのに見えていない。病的に歪んだ親子関係が、地域にあると言うことです。学校、善意の良識の人である先生にある種の欲求不満のはけ口としてぶつかってゆく、という理由があるということです。

このモンスターペアレンツに関しては奥が深いです。ただ変な親が出てきて何か変なことを言うらしいというようなお話かと思っていたのですけれど、取材をつづける度に次々に新しいことが出てきて、勉強になりました。

著書(『親たちの暴走』朝日新書)にも書きましたが、親もモンスターティーチャーに困るわけで、先生だってかつてはいじめに加担してしていたわけです。中野富士見中事件の鹿川君は「生きジゴクだよ」と言って自殺に追い込まれてしまったわけです。葬式ごっこに先生が加担したり、痴漢を捕まえたら先生だった。先生は神様ではないし、かといって先生を困らせるのも良くないし、どちらも私たちと同じ社会に生きているわけです。

### アメリカ発「ヘリコプターペアレント」

アメリカにもこういうような親が出てきている、という話しをします。アメリカでは「ヘリコプターペアレント」という言葉が出ています。Webサイトで検索すればたちまち出てくると思います。小さなヘリコプターですから、子どもの頭の上を動きが軽いので旋回して何かあればサーッとやってきて着陸して子どもを救出できるわけです。著書にも書いてあります(『親たちの暴走』P112)が、フォスター・クライン医学博士というアメリカの先生によって1990年に出版された『愛情とロジックのペアレンディング:子どもに責任を教える』という本の中ではじめてヘリコプターペアレントという言葉を使って、ヘリコプターペアレントになってはいけません、という風なたとえでヘリコプターという名前をつけたんですけれど、どこの国も一緒です。マスコミが飛びつきまして、あっという間に「ヘリコプターペアレント」という名前が定着いたしました。

日本と違うところは、実は大学が舞台なのです。日本は幼稚園保育園から始まりまして、中心は小学校中学校辺りだと言われています。昔アメリカですと、18才の時にプロムを終えて、大学の時に寮に入る時が子どもにとっては親離れ、親にとっては子離れの通過儀礼であったわけです。今は、携帯が長いヘソの緒と言われています。遠くに行ったはずの自分の子どもとすぐにつながるわけです。ある大学では、新人オリエンテーションの一つとして「セックス・エドュケーション」をやります、といったところ、ある女子学生の手がスッと挙がって「内容に関して母が心配だと言っています」と。携帯片手にライブで連絡しあっているのですね。「セックス・エドュケーション」と聞いて、どこの親もビックリするのですが、内容としては大変真面目なモノで「セクハラはいけません」「自分の体は大事にしましょう」とか、寮生活に入りますから男女でマナーを大事にしましょうね、という

恒例のオリエンテーションですけれども、「携帯で、今母がやめてくださいと言っています」というような過保護な親なんですね。

かつてのアメリカの大学生といえば夜遅くまで図書館で勉強するのですとか、夜遅くまで論議するとかでしたのが、今は休みともなれば格安チケットを手に、親元へサァーッと帰ってしまう、というのですね。昔は知らない者同士で話しをしたり、論議をしたり、将来についての話しをするのが人間成長の場だったのですが、今は親子密着が見られるというわけですね。子どもがそれをいやがっていないのが驚きなんです。かつては、子離れしていない親が恥ずかしいのがアメリカ人だったのに、今は親が教授のところまで電話をかけてきて口を出してくる。子どももそれを嫌がらず黙って横に立っているだけだ、というわけなのです。子どもの頃からチューターをつけてくれたり、カウンセラーをつけてくれたり、自分のことをいちばんよく知ってくれているのは親なんだ、という。その親の言うことなら間違いはないんじゃないか、と親の言うことなら喜んで聞く、というわけです。

これが就職などにも来ていますし、結婚の相手までも親が相手を紹介する、ということらしいのです。親は親の生活を持って過保護からすぐに手を引きなさい、と大学側が言っているようです。そういっても親は言うてくるわけです。「ヘロパット」と言って、Tシャツを作って大学の中を歩いちゃう。そこまで行くとアメリカらしいなあと思うのですが、なかなか大変な状況です。

### イギリスでは「フリーガンペアレント」

あるいは、イギリスで私は6年程暮らしていたわけですが、「フリーガンペアレント」という私が名付けたものですが、フリーガンとは暴力を振るう「ならず者」という意味です。アイルランドから出でいる言葉です。サッカーの熱狂的なファンをさします。学校にフリーガンペアレントが出現しまして、言葉で先生を罵倒する時期があったのですけれど、あつという間に暴力を振るうようになってきてしまったのです。

イギリスでは大きな問題になっております。あるお母さんが、遠足の費用が出されていないので学校に呼び出されて行ったそうです。まだその時も払うことができなかったわけです。ほんのわずかな費用が払えなかった、と。帰る時に後ろの方で女の先生の笑い声が聞こえた、というのですね。これは、自分が笑われたと思ってしまって、もとの方に戻って、その先生を殴り倒した訳なのです。先生は妊娠中で大騒ぎになり救急車で搬送されたのです。幸い無事だったそうですが、これは15年ぐらい前でしたか母親が妊娠中の先生を殴った、と社会に取り上げられました。反響が大きく、自分もタバコの火を押しつけられた、ネクタイをつかまれて引っ張られたなど、親からの暴力を振るわれるような時代になってしまいました。

イギリスは階級社会です。一般的に、フリーガンペアレントには労働者階級が多い、ということも言われていますが、これは、労働者階級だから、というわけではありません。イギリスの労働者階級の中には立派な方がいらっしゃいますし、誇りに思って生きていらっしゃる方もたくさんいます。

取材をした親の中にはNPOで解決していく動きがありました。親の問題を学校まで持ち込まないように自分たちの仲間の親や教師の中で、困った人や、孤立していたり、貧困だったり、DVで苦しんでいたりと、ドラッグが蔓延しているような地域があったりと、そ

うというような地域で、親が先生に暴力を振るうようになる前に、親たちで、PTAで、コミュニティで地域で何かできないか、という動きが出できたわけです。「ホームスタート」という、これは日本でもイギリスを見習ってスタートしました。ご近所で小さいお子さんがいる、赤ちゃんの生まれたご家庭がある、ということになりますとそこに近所のお母さんたちが出かけて、産後うつになっていないか、おいしい物をちゃんと食べているのか、DVの被害にあっていないか、困窮していないか、など予防となるように学校に入る前から助け合って、親をコミュニティから孤立させないような、助け合って自分たちでできることをやって、いわば予防のようにフリーガンペアレントをださないようなシステムがNPOから発足しました。

### 学校に持ち込まないで地域で問題を解決するイギリスのメンター制

このような活動が親たちの間から出できたわけです。あるいはメンター制というのがありますね。日本では企業などで使われておりますが、メンターというのは自分の子どもを預けるのに足る「親友」という意味ですが、メンターにわが子を託する、ということですね。地域でメンター制を取り入れ、地域の社会人の方、銀行員など、取材したのは病院の職員の方だったのですが、月にたった一日だけ、一時間だけ午後4時～5時と仰っていらっしやいましたけど、地域の公立中学校三年生の女の子に会いまして、社会人として会って、「ボーイフレンドいる?」「学校楽しい?」という気楽なお話から、地域の中で解決していく。学校でも家庭でもない、先生と親、という枠組みを取っ払ってしまって広く地域に知恵を求め、ひらいてフリーガンペアレントをなくしていこう、という試みですね。第三の場として地域に開放する。30代40代の社会人メンターの方と話しをする中学生たちは、親や先生に言えないことを言うそうです。効果がとても高く、非行や登校拒否、厳しい虐めの救いの場になるそうです。たくさん経験を積んだメンターの方はボランティアですが、さすがイギリスです。勤務先の病院は是非してあげなさい、と行って減給されることなく、許可してくれているそうです。仕事の一時間をそういう活動に使うことに対してOKが出ているということが、イギリスらしいと思ったのです。イギリスでは、妊娠中の先生に手をあげるという状況がある一方、地域で解決していこう、という両極の動きがある、ということなんです。

困った親がいる、ということで終わらないで良識ある親御さんたちが、だったら地域で自分たちの間で解決しよう、そうした動きが出ているということなのですね。何か自分ができることがあれば、今まで子どもが小さかった時に近所のボランティアの方に助けられたので、今度は私が助ける番です、と仰ってました。

### 「コミュニケーション」を図り、次のステップへつなげていく努力が必要不可欠

日本の方に戻ってみたいと思います。各自治体が何にもしていないかということ、そういうわけではないのです。港区は富裕層の多い区なのですが、弁護士制度がありまして学校にクレームが入ったときには弁護士が仲介するという港区教育委員会が2007年に『学校法律相談制度』を作り注目されました。先生が弁護士に助言を求めることができる制度です。さまざまな助言を弁護士ができるわけですが、この制度を立ちあげたことでモンスターペアレントの苦情が激減したそうです。そういうものなのですよ。アナウンス効果

というのでしょうか、面白半分に言ってくる親がいるということですから、学校側もいちいちピリピリしてはいけませんよね。応える必要もないのではないかと、でも無視するわけにもいきませんのでその辺りの見極めがとても難しいですよ。

他の自治体でもやりたい、ということですが費用のかかることですので、今聞いているのは、江東区には嘱託の元講師や臨床心理士の方にチームを作っていて、先生が困ったときに相談できるようにしたそうです。ですから、先生の頭がクレームでいっぱい、という状況は避け、ベテランの先生が解決して下さるといふ仕組みになっているそうです。江東区の教育委員会の方とお話をしたのですが、ある時、おばあちゃんから電話がかかってきて、孫の成績が悪いとおっしゃるようなので、話しを聞いてあげたところ「嫁が冷凍食品しか食べさせてくれない」という話が出たんですよ、と。ある種の孤独や寂しさを抱えていて、なかなか学校に直接文句というよりも、日々のコミュニケーションの不足を感じています、と仰っていました。

江東区ではホテルの講師を呼んで研修しているのですね。学校の先生の研修にどうしてホテルの方を呼ぶのですか?とお伺いしました。ホテルマンの先生が、「親御さんがいらっしゃる時には笑顔で迎えていますか?」とまず聞くんだそうです。そうすると、先生は迎えるときには、また面倒くさいことを言われるのではないかと、という顔をしてムーとしてしまっている。そうではなくて、「こんにちは」とか「よくいらっしゃいました」「どうぞどうぞ」という顔でむかえるべきである、と指摘されて、ホテルの研修で先生方は学ぶわけですよ。

スリッパで走り回ってなかなか親の言うことを聞いてくれない、という先生が多いということではいけない。ジャージとスリッパ姿で迎えられたら、親としては淋しい気持ちがありますよね。先生にはきちんとした服装をしてほしい、という気持ちがありますよね。たとえばホテルではお客さまから「ゴミが落ちているじゃないか」というクレームが入るんです。ゴミぐらい自分で拾えば良いじゃないか、と思うところをホテルでは「申し訳ありません。今すぐお部屋に伺って拾います」と仰るそうです。そういう風に学校もサービス業のような気持ちで対応してはどうか。ふんぞり返ってはいけないのではないかと、ということで講師の先生から対応を学んでいくわけですよ。ホテルではこんなことをしているんだ、ということが教育現場の先生方に良い刺激になっているそうです。そのぐらい親に対して先生もきちんとマナーを守ってほしい。相談事をしたときにあんまりキレイじゃないジャージを着てパタパタパタッとスリッパで走って行っては、残念な気持ちですよ。

イギリスの学校の先生ですと、親が学校に対して言ってくるということは、先生に対する期待があるからなのではないだろうか。期待の裏返しだと思っている、とある先生が仰っていました。嬉しいことなのではないかと、と。学校を見捨ててないのではないかと。どうして私に家庭内暴力のことをいうのか。私はカウンセラーじゃないよ、と思うと先生は仰るのですが、親だからと思うから腹が立ったりするのではないかと。困っている人がいれば救いの手をさしのべるということは人間同士と思えば当たり前のことではないかと、とおっしゃっていましたね。親だと思っから「私の専門は子どもなんだよ、明日の授業の準備があるのだよ」と思ってイライラするのでしょうか。しかし、親が困っていたり家庭内暴力で家庭が荒れていたら子どもにも悪い影響を与えるわけですよ。子どもが悲しい思いをした

り、辛い思いをするわけですね。たとえ間接的でも、親を助ければ子どもを助けることである、ということなんですね。

そういう時には、家庭内暴力で困っているならここへ行ったらいいい、とか。困ったことがあれば、移民の方で経済的に困っているというのであればあそこへ行けば生活保護の手続きができますから、とか。子どもが熱を出したのですけどどうしていいか分からない、というときには NHS の無料の医療を受ければ良い、とか。自分が走り回って助けなくても、次に繋げていくことぐらい教師はできるはずだ。時間があるはずだ。それは必ず子どもに返ってくるはずだ、と熱を込めて仰った先生がいらっしゃいました。その辺が救いだと思います。良心的な動きが出てきている社会だ、ということをおきたいと思えます。

(文・構成 古崎千穂)